様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 4 月 10 日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2006～2008
課題番号：18330194
研究課題名（和文）　対話による意味生成的な美術鑑賞教育の開発

研究課題名（英文）　Curriculum Development of Art Appreciation Program through Meaningful Dialogue

研究代表者
上野　行一（UENO KOICHI）
高知大学・教育研究部人文社会科学系・教授
研究者番号：40284426

研究成果の概要：本研究を通して、対話による意味生成的な美術鑑賞教育の理論および方法論を構築し、その成果を『対話による鑑賞教育―美術・図工教師のための実践ガイドブック』（光村図書）および『モナリザは怒っている!?』（淡交社）にまとめた。学校と美術館、地域が一体となって進める鑑賞教育プロジェクトを立ち上げ、企画展『美術館でおしゃべりしよっ!』を長野県下で開催した。また美術鑑賞フォーラムを 4 回開催し、これらの成果を国際美術教育学会等で発表した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
2007 年度	4,300,000	1,290,000	5,590,000
2008 年度	6,400,000	1,920,000	8,320,000
年度			
年度			
総　計	14,500,000	4,350,000	18,850,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教科教育学
キーワード：各教科の教育（図画工作・美術工芸）

１．研究開始当初の背景

本研究の全体構想は、小・中学校９年間を見通した対話による意味生成的な美術鑑賞教育を開発することである。本研究では鑑賞教育の目的を、児童・生徒の美術作品等との出会いから、見る（触る、体感する）等の体験活動を通して美術への興味・関心や理解を促し、美術に対する自己の見方や感じ方、考え方を形成することと捉えている。

鑑賞の体験が自己の表現活動に生かされることや、情操を豊かにし精神形成に寄与していくことなども期待される成果である。

２．研究の目的

こうした全体構想をもとに本研究課題の目的を次のように設定した。鑑賞教育の実施状況を見ると、そこには児童・生徒作品の相互鑑賞や美術館での作品鑑賞、模写や美術作

品を用いたパズル・ゲームづくりなどの体験的な鑑賞、地域作家の制作現場の訪問鑑賞など多様な実践が見られる。その中で対話を通しての意味生成的な美術鑑賞学習に焦点を当て、学校と美術館の密接な連携による教育実践を創出すること、また、小・中学校９年間を見通した発達課題を策定し、それを踏まえた目標と評価規準を構築することが本研究課題の目的である。

３．研究の方法

❶教材（鑑賞対象作品）の選定と授業評価による有効性の検証

本研究では美術作品を対象とし、児童・生徒の発達段階や鑑賞経験に応じた対象作品を選定する。選定作品の有効性を児童・生徒による授業評価を通して検証する。

❷対話による意味生成的な美術鑑賞学習の理論及び方法論の構築と授業を通した検証

技術や知識の習得に焦点が当てられていた従来の学習モデルから、自律的な思考様式を育てる省察的な学習モデルへの転換は今日的な教育課題であるが、美術鑑賞学習においてその理論及び方法論を構築し、授業実践を通してその価値や有効性を検証する。

❸小・中学校９年間を見通した美術鑑賞の発達課題の策定と検証

小学校・中学校の学習指導要領ならびに各地域の研究資料をもとに、美的発達段階の先行研究を踏まえて、美術鑑賞に関する発達課題を策定する。

❹教師用ガイドブックの作成

教材（鑑賞対象作品）はデジタル画像化し、DVD=ROM に収める。教師用ガイドブックを作成する。

❺学校と美術館の連携による授業実践と評価

対話による意味生成的な美術鑑賞学習を、学校と美術館との連携により実施する。

４．研究成果

(1)　鑑賞対象作品の選定と授業実践による有効性および小・中学校９年間を見通した美術鑑賞の発達課題の策定

17 年度に研究代表者（上野）が作成したティチャーズキット mite！（淡交社）を用いた研究授業実践を、小・中学校において計 25 回実施した。また、2 月には公開授業発表会を開催し、全国 120 名の参加者による討議が行われた。アビゲール・ハウゼン(Housen, A)による先行研究に見られるように、美的発達段階の移行は精神発達依存よりも、鑑賞経験の質と量が大きく影響していることがプロトコル分析より追認された。

子どもの鑑賞の特性として、

・自分と重ねて見る
・自分の見たいところから見る
・意味を探る
・本質を見る

の 4 点を抽出した。指導過程はこれらの特性を背景に構築されることになる。なお、このことの詳細は(7)の『モナリザは怒っている!?』にまとめた。

また、意味生成的な授業によって生徒の能動的な学習が推進されることや、有効性がデータから実証された。感性的あるいは美術史理解的な鑑賞教育に対して、PISA 型読解力を能動的に身につけさせる意味生成的な美術鑑賞の必要性、有効性、現代性が確認されたといえよう。

(2)　対話による意味生成的な美術鑑賞学習の理論及び方法論の構築

課題を究明するため、鑑賞教育に関するフォーラムを４回開催した。(18 年 6 月東京、19 年２月高知、20 年２月高知、21 年２月東京)。全国造形教育連盟、日本美術教育連盟をはじめ美術教育に関わる主な組織の参加を得て充実した研究を行うことができた。理

論と方法論の詳細は(5)教師用ガイドブックにまとめた。

(3)　学校と美術館の連携による授業実践と評価

平成 18 年 7 月 21 日より 8 月 20 日にかけて岡山県立美術館において「mite！展」を開催した。同展における対話による美術鑑賞ツアーには、近隣の小・中・高校生が 1057 人参加した。

(4)　地域一体の美術鑑賞教育推進システムの構築

(2)を検証し、(3)の研究を発展させる目的で、地域一体の美術鑑賞教育推進システムを構築することが必要であると考えた。長野県をその具体的な地域として位置づけ、県内の県立・公立・私立の全美術館・博物館等に呼びかけるとともに、県教育委員会、県の美術教育教員組織、小・中学校の教員有志、信州大学の美術教員有志による推進組織を構築した。

全体会議を 3 回開催し、対話による美術鑑賞の理念と方法論を共有するとともに、その普及のために教員研修会を 5 回開催した。全体会議を経て、信濃美術館を中心に美術鑑賞教育普及のための特別企画展を、20 年度に開催することが決定された。

地域一体の美術鑑賞教育を具体的に推進する方策として、企画展『美術館でおしゃべりしよっ!』を長野県下の各地域で開催した。信濃美術館を皮切りに豊科近代美術館、梅野記念絵画館、椋鳩十記念館を巡回し、それと連動する形で当該地域の小・中学校において対話による美術鑑賞教育を行うという計画である。

開催地は長野県信濃美術館（6 月 3 日から 6 月 27 日)、安曇野市豊科近代美術館（7 月 19 日から 9 月 7 日)、東御市梅野記念絵画館・ふれあい館（10 月 19 日から 11 月 16 日)、喬木村椋鳩十記念館・図書館(11 月 26 日から 12 月 2 日)である。年間を通して地域全体をカバーするように移動展示し、企画展の開催中は当該地域の学校が鑑賞の授業を実施した。

(5)　教師用ガイドブックの作成・配布

小学校及び中学校における授業実践のための具体的な指導書を作成した。児童・生徒の実態把握のためプレ授業を 6 回実施した。プロトコル分析し、実践データをもとに指導案をつくり、教師用指導書を作成した。指導書は 7 月末に光村図書より刊行し、全国の学校教員、美術館学芸員に無料配布した。部数はおよそ 5000 部である。

(6)　海外先行研究調査

18 年度、19 年度とスペイン国バルセロナ市において、mite！の先行事例である mira！に関して現地調査した。バルセロナ自治大学の協力を得ることができ、研究は飛躍的に進展した。これまでわが国とスペイン両国間に十分ではなかった今後の美術教育交流の道も開かれ、国際交流による共同研究を検討しているところである。

以上の成果に関しては、8 月 22 日・23 日に韓国ソウル市のソウル大学にて開催された INSEA(国際美術教育学会)において上野、岩崎、日野が口頭発表を行い、また論文を国際美術教育学会に投稿（査読有）記載された。

(7)　対話による授業研究 DVD ブック（『モナリザは怒っている!?』）の作成

19 年度より企画準備してきた授業研究用 DVD の作成が完了し、19 年 12 月に刊行した。対話による美術鑑賞の授業の姿を、映像によるプレゼンテーションと解説により、わかりやすく具体的に示したものである。(5)と併用することで、対話による意味生成的な美術鑑賞の授業実践に明確な指針が示されることになる。すでに北海道、秋田、山梨などで

これらを用いた授業研究会が実施・企画されており、研究の飛躍的な発展が望まれる。

(8)　文化・美術作品の選定（子どもに見せたいベストテン）

(8)については長野モデルを全国展開するための予備的考察である。具体化は次期研究プロジェクトに委ねられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 15 件）

1.岩崎由紀夫、「小学校新学習指導要領全文と解説　図画工作科の改訂」、小学館教育技術、pp.146-147、平成 20 年、査読無

2.岩崎由紀夫、「形や色、図工カードなどを活用し、コミュニケーションを図る指導」、小学館教育技術小３　９月号、p.55、平成 20 年、査読無

3.岩崎由紀夫、「光の色と絵の具の色は違うというが何が違うのか？」、(財)教育美術振興会「教育美術」、p.40、平成 21 年、査読無

4.奥村高明、「造形活動における相互行為分析の視座―授業研究・指導法改善の方法論（１)」,『日本美術教育研究論集Vol.42』, pp.9-16, 平成20年2009、査読有

5.奥村高明、「子どもたちの創造的な鑑賞とこれからの美術教育」、美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修記録集、pp.94-107、平成20年度、査読無

6.上野行一、岩崎由起夫、岡崎昭夫、奥村高明、日野陽子、「Another Trend in Art Appreciation through Dialogues」、The 32nd InSEA World Congress 2008 in Osaka, Japan, Proceedings、CD-R 収録pj93、平成20年、査読有

7.上野行一、岩崎由起夫、岡崎昭夫、奥村高明、日野陽子、「Curriculum Development of Art Appreciation Program through Meaningful Dialo gue」Proceeding 2007 InSEA Asian Regional Congress,Seoul National University、P.P.398-407、平成 19 年、査読有

8.廣畑浩、日野陽子、上野行一、特別展「mite! おかやま」における鑑賞体験ツアーナビゲートスタッフの養成について」、日本美術教育学会誌 291 号、pp.92-99、平成 19 年、査読有

9.三澤一実、「とがびプロジェクト-地域・学校・美術館の連携のあり方-」、信濃美術館紀要 2007、pp.25-29、平成 19 年、依頼原稿

10.奥村高明、「創造的な学習としての鑑賞と指導法の改善」、『初等教育資料』No.811、p.p.58-65、平成 18 年、依頼論文

11.上野行一、「なぜ子どもに鑑賞教育が必要なのかー対話型鑑賞の現在とその意味」、『美育文化』５６巻５号、p.p.13-19、平成 18 年、依頼論文

12.日野陽子、「鑑賞の質的共有をめざして―視覚に障害のある人々と共に行う美術鑑賞に学ぶ (2)、『日本美術教育学会学会誌「美術教育」』No.290、p.p.26-35、平成 18 年、査読有

13.上野行一、「学校と美術館が連携した鑑賞教育の実践研究」、『教育学論説資料』23 号、p.p.785-793、平成 18 年、査読有

上野行一、「アートが子どもの未来を変える－対話型鑑賞教育への試み」、『美術画報』No.53、p.p.100-103、平成 18 年、依頼論文

14.奥村高明、「空間と世代を交差するコミュニケーションとしての「とがびプロジェクト」」、長野県信濃美術館紀要 2006　第一号、pp.84-89、平成 19 年、依頼論文

15.奥村高明、「行為する観賞・開いていく鑑賞～東京国立近代美術館工芸館の試み～」

51-53ｐ、たんけん！こども工芸館～タカラモノみつけた～東京国立近代美術館工芸館の鑑賞教育プログラム」2007、東京国立近代美術館、依頼論文

〔学会発表〕(計 18 件)

1.岡崎昭夫、「鑑賞教育のカリキュラムについてーアメリカの事例から」、第 4 回美術鑑賞教育フォーラム、平成 21 年 2 月 22 日、文部科学省

2.日野陽子、三澤一実、「鑑賞教育のための特別展についてー長野県の美術館と学校の取り組みを巡ってー」、第 4 回美術鑑賞教育フォーラム、平成 21 年 2 月 22 日、文部科学省

3.岩崎由紀夫、「mira！と mite！に関する研究」、第 4 回美術鑑賞教育フォーラム、平成 21 年 2 月 22 日、文部科学省

4.奥村高明、上野行一、「対話による美術鑑賞と子どもの学び」、第 4 回美術鑑賞教育フォーラム、平成 21 年 2 月 22 日、文部科学省

5.上野行一、招待講演「モナリザは怒っている!?」、西日本私立小学校教育連合会、平成 20 年 11 月 7 日、近畿大学

6.奥村高明、「創造的な実践としての鑑賞教育－鑑賞活動の授業分析を通して－」、平成 20 年 11 月 3 日、高知大学

7.奥村高明、「課題研究　鑑賞教育の現状と課題」、平成 20 年 11 月 2 日、高知大学

8.日野陽子、「Another Trend in Art Appreciation through Dialogues」INSEA（国際美術教育学会）The 32nd InSEA World Congress 2008、In Osaka, Japan、平成20年8月8日、大阪国際交流センター

9.奥村高明、「招待セミナー美術教育における感性と認知の問題」、大学美術教育学会、INSEA（国際美術教育学会）The 32nd InSEA World Congress 2008、In Osaka, Japan、平成 20 年 8 月 6 日、大阪国際交流センター

10.上野行一、「対話による美術鑑賞教育の日本における受容過程」、INSEA（国際美術教育学会)、平成 20 年 8 月 8 日、大阪国際交流センター

11.上野行一、招待講演「地域の文化･伝統と美術鑑賞」、愛媛県教育委員会、平成 20 年 7 月 29 日、愛媛県美術館

12.上野行一、招待講演「対話による美術鑑賞の授業」、秋田県教育委員会、平成 20 年 6 月 6 日、秋田市千秋美術館

13.奥村高明、招待シンポジウム「アートの教育の可能性を拓く―芸術系教科の授業削減計画再考―」、平成１9 年 9 月 16 日、日本教育心理学会、文教大学

14.上野行一・岩崎由起夫・日野陽子、「Curriculum Development of Art Appreciation Program through Meaningful Dialogue」、INSEA(国際美術教育学会)、平成 19 年 8 月 23 日、ソウル大学(大韓民国)

15.上野行一、招待講演「対話による意味生成的な美術鑑賞教育の開発」、豊田市美術館、平成 19 年 8 月 18 日、愛知県豊田市

16.上野行一、奥村高明、岡崎昭夫、日野陽子、「対話による意味生成的な美術鑑賞教育の開発」、美術科教育学会、平成 19 年 3 月 25 日、金沢大学

17.上野行一、澤本芽「対話する美術鑑賞に関する実践的研究」美術科教育学会、平成 19 年 3 月 25 日、金沢大学

18.廣畑浩、上野行一、日野陽子、「特別展 mite！おかやま鑑賞体験ツアーにおけるナビゲーターの変容」、美術科教育学会、平成 19 年 3 月 25 日、金沢大学

〔図書〕(計 9 件)

1.上野行一、『対話による鑑賞教育―実践ガイドブックー』、光村図書、全 20 ページ、平成 20 年

2. 上野行一、奥村高明、『モナリザは怒っている!?』、淡交社、全 64 ページ、DVD-ROM 書籍
平成 20 年
3. 岩崎由紀夫、他17名、『形・色・イメージ＋これからの図画工作』、日本文教出版、pp. 34-42、平成20年
4. 岩崎由紀夫、他35名、『「教材学」 現状と展望』、協同出版、pp. 186-196、平成20年
5. 岩崎由紀夫、他17名、『図画工作科指導法』、日本文教出版、PP. 142-153、平成20年
6. 岩崎由紀夫、竹井史、「資質能力を育む新図工科授業づくりのアイデア集-指導と評価のポイント」全 6 冊、明治図書、平成 19 年
1 年生編 pp. 108-112、2 年生編 pp. 113-117、3 年生編 pp. 107-111、4 年生編 pp. 105-109、5 年生編 pp. 112-116、6 年生編 pp. 113-117.
7. 奥村高明、『教育心理学の最先端～自尊感情の育成と学校生活の充実』、あいり出版、p. p. 99-101、平成 19 年
8. 奥村高明、『教育心理学の最先端～自尊感情の育成と学校生活の充実』、あいり出版、p. p. 99-101、平成 19 年、全 261p
9. 奥村高明、「図画工作科・美術科の学習指導要領の教科内容構成の検討」, 西園 芳信・増井三夫編著『教育実践から捉える教員養成のための教科内容学研究』風間書房、p. p. 205-209、平成 21 年、全 256 p

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕

６．研究組織
(1)研究代表者
上野　行一（UENO KOICHI）
高知大学・教育研究部人文社会科学系・教授
研究者番号：40284426
(2)研究分担者
岩崎　由紀夫(IWASAKI YUKIO)
大阪教育大学・教育学部・教授
研究者番号：40304076
岡崎　昭夫(OKAZAKI AKIO)
筑波大学・人間総合科学研究科・教授
研究者番号：80134253
奥村　高明(OKUMURA TAKAAKI)
国立教育政策研究所・教育課程センター・教育課程調査官
研究者番号：80413904
日野　陽子(HINO YOKO)
香川大学・教育学部・准教授
研究者番号：90269928
三澤　一実(MISAWA KAZUMI)
武蔵野美術大学・造形学部・教授
研究者番号：10348196

(3)連携研究者

なし